

ブダペスト 史覚書

丸 山 圭 一

ハンガリーの首都ブダペストは今日人口200万余を擁し、ベルリンにつぐ中東ヨーロッパきっての大都市である。ブダペストは国のほぼ中央に位置し、ドナウ川が北から南へ町を二分して貫流している。いや歴史に即して言い直すならば、もともと川に沿った別々の三つの町——オーブダ、ブダ、ペスト——が1873年に一つに合併して出来たのがブダペストである。右岸ブダ側は森林に覆われた丘陵をなしてハンガリー西部の低山地帯に連なり、左岸ペスト側は東部に広がるアルフェルドと呼ばれる広大な平原の末端をなしている。ドナウを間に挟むこのような起伏に富んだ地形と、ハンガリーの歴史を宿す各々の地域特有の雰囲気、諸々の建造物との有機的調和、これらこそブダペストの独特の魅力の主たる源泉である。その風光は「ドナウの薔薇」「ドナウの真珠」とつとに美しさを讃えられ、ヨーロッパを始め、世界各地から多くの観光客を招き寄せている。

山岳地帯と大河と平原の接点という地勢上の好条件からブダペストは早くから人が住みつき、交易が行われていたが、その美と活力は単にそのような立地条件の好きのおかげだけではない。その今日の姿は何よりもまずハンガリー近代化の華である。ブダペストは政治、経済、文化の中心としてハンガリーの歴史的発展を集約的に表現し、社会的矛盾、精神的諸価値の対立をもっとも尖鋭に際立たせることで自らの歴史の相貌に刻み上げてきた。それはまた幾度となくハンガリーの運命のどん底をも体現し、度重なる戦乱の中で破壊の極に追い込まれもしたが、その度にたくましい復興の力を示して蘇った。それらの活気ある生命力を、ブダペストを訪れるすべての人が肌に感ずることができる。

もともとこの小論は、ブダペストで今世紀初頭に驚くべき文化的活力が顕在化し、多数の才能が育った歴史的根柢を訊ねようという問題意識に発して、その一要素としてブダペストそのものの歴史的展開を簡潔に概観する必要から生まれたもので、本質的に自己了解のために書きつけた覚書以上のものではないが、ブダペストを舞台とする社会的・精神的諸問題に関心を抱く人々の参考にと供しつつ、あわせて批判と教示を得たい。

1

今日のブダペストを形作ったのは何よりもその近代の歴史そのものである。従ってここでは、それを見るための前提として必要な限りでのみ、前史に触れておくことにする。

ブダペストの三つの構成部分の歴史は緊密に絡み合っているとはいえ、長い間それぞれ自立した町であった。すでに紀元前からブダにケルト系の集落があったことが知られているが、最も早く開けたのは上流のオーブダであった。ローマ帝国の辺境州パンノニアの州都アクヴィン

クムがこの地にあった(4世紀まで)。考古学的調査と発掘は当時の生活を徐々に明らかにしつつある。この都市が大規模な円形劇場を二つ持っていたことはローマ帝国でも数多くない例に属し、その重要性を示すものであろう。対岸にも下流に砦が築かれ、コントラ・アクウィングムと呼ばれていたが、それは後のペスト市の核となる。軍事指導者アールパードに率いられたハンガリー人たち(マジャル人諸部族)が現在のハンガリーの地(カールパーチア盆地)に姿を現したのはようやく9世紀末のことだが、オーブダは彼らの行政の中心の一つとなった。1000年イシュトヴァーン一世はこの地に国家を樹立するとともに、キリスト教を採用し、アールパード王朝300年の間に三つの町は交易の中心として栄えるようになった。しかし13世紀のモンゴル人の来襲は当時の建造物をほとんど地上から一掃してしまった。その後ベーラ四世はブダの山に王城を新しく建て、行政の中心はそちらへ移った。オーブダとは古ブダを意味し、後にそれまでのブダを区別してそのように呼ぶようになったのである。(オーブダはそれ以降歴史の表舞台から退き、ぶどう栽培などを中心とした農業都市となる。)因みに、ブダという名はおそらくは人名から転じたものと言うのが有力な説である。ペストはもともとブダ側ゲレールト山のふもとの地名で、かまどの類を表すスラヴ系の言葉だったが、兩岸にまたがって用いられていたようである。中世ブダのドイツ語表記がペストと類義語のオーフェンであるのもこの事情に由来する。城山にはペストからだけでなく、ドイツ人なども移り住み、王が特権を与えて保護したため、経済的にも繁栄した。ブダは14世紀から15世紀にかけてジグモンド王のもとで、またとりわけマーチャーシュ王のもとでルネサンス文化の栄華を誇り、ヨーロッパの文化、芸術の中心の一つとなった。手写書を集めたそのコルヴィナ文庫は世界に広く知られている。今日でも多くのハンガリー人の意識の中でブダのイメージはマーチャーシュ王の名と結びついている。ブダにはおよそ8,000人が住み、ハンガリー最大の都市であったが、ヨーロッパ的規模では小都市にすぎなかった。この頃50近いツンフトがあったが、市民階級はまだ政治にほとんど影響を与えることができなかった。ブダなどの王国自由都市は直接王権に従属し、自治権と種々の商業特権を手に入っていた。マーチャーシュ王のもとでペストもブダに次ぐ自由都市となり、周りには三つの門を持つ市壁が築かれた。だが16世紀半ば以降トルコの支配下に入ったブダとペストは、一転してその辺境の都市となり、軍事上の観点からしか見られなかったためにすっかり荒廃してしまった。中世ブダが誇ったゴシックやルネサンス様式の華麗な王宮、教会建築を今日そのままの形で目にすることはできない。ただチャーサール、キライー、ルダシュなどの温泉はこのトルコ支配時代からの遺産である。ブダペストは豊富な温泉を持つ首都としても今日名高い。

1686年、145年間に及ぶトルコ支配からの解放は、今度はハンガリーをハプスブルク家オーストリアの属国とした。これは1867年の「和解」、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の成立まで続く。皇帝の居城はウィーンに、そして限定して認められた自治行政の中心もポジョニ(ウィーンに最も近いハンガリーの都市、現在スロヴァキアの首都ブラチスラヴァ)にあった。荒廃したブダとペストにはドイツ化策のために植民が進められた。1720年には、ハンガリー国内で一万人を越す人口を持つのはブダだけだった。ペストも国の内外からの人口の流入に伴い、18世紀末にはようやく都市らしい様相を呈するようになり、この頃には経済活動の点でも人口の点でも、二つの都市の重心がペストの方に移り始めた。ペストは、ハンガリーにとってだけでなく、西ヨーロッパとバルカンを結ぶ交易の要衝でもあった。両都市の性格も際立ち始め、ブダに公政治の関係者や知識人たちが多く住んだとすれば、ペストは圧倒的に商人と職人の町で

あり、言わば山の手と下町の関係であった。新しい建物がどんどん建てられていった。ペストの大学教会やブダの多くの住居はこの頃の支配的な建築様式——バロック——を丹念に修復して今日に伝えている。ペストの町は市壁の外に発展しはじめ、壁は住居群のまっただ中に取り込まれた（博物館通りなどでこの旧市壁の遺跡を観察することができる）。そしてその外側に沿って環状道路が敷かれた。ナジソンバトにあった大学がブダに、やがてペストに移されてここに国の精神的中心が形成され（医学、法学、哲学、神学の四学部があった）、そのまわりに印刷、出版活動も集中しはじめた。

マリア・テレジアやヨーゼフ二世の名と結びつく啓蒙絶対主義のこの時代、封建制は急速に崩壊しはじめていた。ヨーゼフ二世がそれまでのラテン語に代えてドイツ語を公用語とすることを宣したのは、オーストリアの近代国家としての脱皮だったが、それはハンガリーを支配する貴族たち（奇妙なことにそれまでラテン語には何らの抵抗も示さなかったのだが）に衝撃を与え、ハンガリーの近代国民国家樹立を促すきっかけとなった。しかしその中核となるべき強力な市民階級を欠いていた。さしあたりそれを代替し、その利害を代表したのは、商品生産に参入しはじめていた貴族たちであった。だが他方でこの動きは（そしてやがて実現することになるハンガリー語の公用語化は）、ハンガリー国内の他の諸民族をも重大な岐路の前に立たせることになった。当時ハンガリー人は国内人口の三分の一強にすぎなかった。他の民族は、ハブスブルクを利用しつつ、ハンガリー人と対抗して独自の国民国家を目指すか、それともハンガリーの国民国家形成に協力してそこに社会的地位を築き、しかし結局は同化することになるか、どちらかへ通じる道を選ばなければならなかった。ハンガリー近代化の過程を複雑に彩ることになる諸要因はほぼここに出揃ったと言えよう。

2

中世ハンガリーの首都はブダがその役割を果たしていたが、トルコ支配時代を通じてそれは終焉した。民族的覚醒の時代とも言うべき19世紀前半には、同時代人たちの期待はブダとペストを合わせた両都市に向けられるようになった。しかし近代都市としての歩みはまだこれからであった。市壁、特権、制限された市民権によって枠づけられる中世（及び近代初期）の都市はごく緩やかに発展する。それを担う市民階級は名望を重んじ、リスクを恐れ、収益は主として不動産の購入に振り向けていた。これに対し、近代都市を特徴づけるのは開放性とダイナミックな発展である。ブダとペストではトルコ支配からの解放後ツンフト体制が再建され、この時代数多くのツンフトがあったが、それらはすでに資本の展開と自由な企業活動への障害となっていた。近代的な農業生産の必要を痛感しはじめた貴族たちと利害が通いあう、多少とも資本を持った商人、企業家はまだ数少なかった。ナポレオン戦争後ハンガリーを襲った経済危機は、没落を免れるには資本制生産へ移行するほかないことを貴族たちに覚らせた。そのためには、一方で資本が必要であり、他方で自由な労働力が必要である。前者にはオーストリアへの従属が、後者には農奴制の残存が壁になっていた。セーチェニ・イシュトヴァーンら自由主義的大貴族とコシュート・ラヨシュら急進的な中小貴族が近代国家へ向けての社会改革を訴え始めた。コシュートはさまざまな市民的諸自由と独立の国民市場を要求した。これをできるだけ穏やかに実現するのが、改革期と呼ばれる30-40年代の貴族たちの努力であった。

同時代人たちは、事実上経済的には一つであり補完しあってもいるブダとペストを一つの都

市と見て、ペスト＝ブダと言いなわすようになった。セーチェニは特に二つの都市の統一を強く主張し、すでにブダペストという名にも言及している。彼らの後押しで、ヨーゼフ副王は1808年美化委員会なるものを作ったが、これは都市の計画的整備に携わる初めての公共機関で、ブダをもペストをも同様に対象としていた。ドナウ川の氾濫は何度も二つの都市を水浸しにしたが、皮肉にもこれらも町並みを整備するチャンスを拵えた。特に1838年の大洪水ではペストの建物の三分の二が壊滅した。美化委員会のもとでその時代の古典主義様式の多くの建物が建てられた(国民博物館など)。建築やドナウの治水事業は経済生活を活発にした。1846年には最初の汽車も走った。計画された鉄道網はすでに全国経済の心臓部としてのペストの位置をくっきりと示している。しかし何と言っても、この時代の最大の成果は、やはりセーチェニに想を発する、鎖橋と呼ばれるドナウの橋の建造である(完成は1849年)。それまでの不安定な舟橋に代わって初めて恒常的な橋がブダとペストを結びつけた。またそれによってハンガリーの東半分と西半分をも結びつけたのである。橋はこの兄弟都市を結合する最も重要な前提でもありシンボルでもあった。

40年代後半のペストはさまざまに分化した社会層の寄せ集まりであり、身分制秩序を越えた自由な雰囲気を実現しはじめていた。市民的改革要求を代弁したのが、市民化しつつある貴族たちであったとすれば、ここには市民化しつつある平民たちがいた。ペストにはいっそう徹底した社会改革を要求する急進派が生まれ、その中心は詩人ペテーフィ・シャーンドルら若い作家や学生たち知識人からなる「若きハンガリー」グループであった。彼らは封建的諸義務の廃棄を支持していた。ペストは当時すでにカフェの町だったが、彼らのたまり場「ピルヴァクス」には多くの市民が訪れた。カフェでの文学的、政治的討論は都市の新しい風景である。1848年3月15日のペスト革命はここから出発した。ペストは4月からハンガリー政府の所在地となった。革命運動は一方でパリやヨーロッパ諸都市の革命の動きと連動しつつ、他方で要求実現のため広範な社会層に訴え、ペストの平民たちもそこに加わった。ハンガリーは独自の国防軍を組織し、翌4月には独立を宣言したが、これは最終的にロシアのツァーの手を借りた皇帝軍によって鎮圧された。49年初めの皇帝軍との戦闘でまたしてもペストの市街は大きな被害を受けた。しかしペスト＝ブダ、とくにペストは、改革過程の中で、単に経済的に国の中心であるだけでなく、政治的精神的にも首都としての機能を闊い取ったのである。封建的割拠を打ち破り、国民国家を形成するための闘いは、その指導的役割なしにはあり得なかったろう。1849年6月、ペストとブダを統一する法的指示がなされたが、独立戦争の最後の日々はもはやその実現を許さなかった。

3

革命は挫折したが、それによって揺り動かされた近代化への決定的な一步はもはや後戻りできないものであった。軍事的威圧のためゲレールト山の上に築かれたツィタデラと呼ばれる要塞は、当初市民の憎悪の的だったが、ハンガリーの支配層が革命の敗北に学びハプスブルクとの妥協に傾くにつれて、やがて観光地と化した。ハプスブルクもまたハンガリー国民市場の形成を妨げることはできず、その中心地としてのペストの比重はますます高まっていった。運輸、交通手段としてのドナウの重要性もペストの地位を不動のものにした。蒸気船の運行や鉄道網の発達に農業の資本主義化の前提条件を作り出した。ペストの農産物取引は60年代初めには帝

国全体の中で支配的な位置を獲得し、蓄積された資本はまず食品業に、そして製粉業や皮革業、醸造業に、やがて農業機具や交通手段のための製鉄業や金属業に振り向けられた。帝国支配層はハンガリーと妥協することで多民族国家の危機を乗り切る決意を固め、こうして1867年オーストリア＝ハンガリー二重帝国が成立した。オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフのハンガリー国王としての戴冠式がブダとペストの双方で行われた。さらに1872年の法令に基づいてその翌年には三つの都市の統一が正式に実現し、帝国第二の都市ブダペストが成立した。(また1892年にはブダペストはウィーンと対等の王座を持つ帝国首都となった。)すでに長い間ブダとペストはあわせて首都の役割を果たしていたし、またマルギット島(ドナウの川中島)のすり団を捕まえるのはどちらの管轄かといったばかばかしいことでさえ議論が灼熱するくらいだったから、この統一はまことに自然でもあった。統一ブダペストの人口28万人、市域はおよそ200平方キロで、当時のヨーロッパの16番目に大きい都市の誕生であった。(1900年にはすでに第6番目になっている。)

ブダペストはウィーンに倣いまた対抗し、都市としての整備を競った。すでに50年代に、当時西欧で生まれたばかりのコンクリートをふんだんに使って、洪水から町を護るためにドナウの兩岸が固められた。60年代にはブダとペストの中心街でガス灯による照明が始まり、夜の通りも歩けるようになった。水は井戸かドナウの水売りに頼っていたが、水道管が引かれた。1866年のコレラの流行もこれを促進した。下水道も敷設された。そして軌道馬車が石を敷き詰めた通りを走った。ブダペストの都市計画は国家的事業と見なされ、首相の下に首都公共事業評議会が設置された(1870)。これは勿論、一つには外国資本の投下を誘おうという魂胆であった。拡大した市域を結んで大環状道路が開かれ、市の中心から放射状の通りがそれに交差した。蜘蛛の網のような今日のペストの道路の原型がこうしてほぼ出来上がる。市の森公園へ導く並木道、シュガール通りと名付けられた広いプロムナードはブダペストの最も美しい通りで、それゆえにこそと言うべきか、時々の政治的関係を映し出して、アンドラーシ通り、スターリン通り、人民共和国通りと名を変え、現在再び、アンドラーシ通りである。1896年の建国一千年祭にはこの下を大陸初の地下鉄が開通した(ロンドンに次いで2番目)。新たに三つの橋(マルギット橋、自由橋〔当時フェレンツ・ヨーゼフ橋〕、エルジェーベト橋)と二つの鉄橋がドナウを渡った。今世紀初めには市電とバスが古くからの乗合馬車に、電灯がガス灯にすっかり取って替わった。煌々とかがやく邸宅やカフェは都市の夜景を一新した。「和解」の当初高層建築は市街地のわずか2パーセント程度だったが、第一次世界大戦前にはすでに五分の一が高層化していた。おしなべて二重帝国時代に市街地は10メートル分高くなった。公共建築物――病院、学校、兵舎、駅など――や高層アパートが当時の特徴的な歴史主義、折衷主義様式で続々と建てられた。今日ブダペストを歩く人は、町並みからかなり均一的な印象を受けるだろう。それを美しいと見るか物足りなく思うかはその人次第だが、この都市は基本的に19世紀後半の顔立ちをして、いや正確にはその頃の色香を残して立っていると行ってよい。折衷主義とは、さまざまな民族、時代の様式と装飾要素の混合であるが、その指導的建築家イブル・ミクローシュの手がけた多くはネオルネサンス様式である(バジリカ、オペラ座など)。国会議事堂のネオゴシック風、漁夫の砦のネオロマン風などもこの折衷主義から派生したもので、やはりこの時代に建てられた。しかし散見されるセセッション様式の建築も目を引く。それは折衷主義に抗して機能性と多くは植物模様の民芸モチーフの結合を特徴とし、民族的様式の創造が追求された。レヒネル・エデンが手がけた工芸美術館はその代表的なものである。

交通や都市基盤の整備は、農業商品の生産・販売とともに、ハンガリー資本主義発展の主要な柱であった。これは利潤志向の新しい資本家層を必要とし、また彼らによって担われた。19世紀の終わりの資本家たちはすでに人脈の点でもメンタリティの点でも、多分に古い市民階級と異なっていた。彼らはまず大商人と銀行家であり、そして建築業者であったが、世紀末までにいく人かの企業家もその仲間入りをした。ほとんどが非ハンガリー系であった。彼らはハンガリーの近代の変革の歴史に深い根を下ろしていなかったから、社会的には孤立し、経済的大胆さはともかく、政治的文化的にはきわめて臆病で、時の政治支配層に迎合していた。このためハンガリーの市民階級は由来からして二元的で、民族を統一する階級としての力は微弱であった。資本主義の発展とともにすっかり土地を失い没落した小貴族（ジェントリ）が、中央政府、自治体の要職を占め、かつて変革と独立運動を担った幻影を背景に自己を民族的統一の核と見なしていた。

ブダペストは文化的にも国の中心であった。1884年アンドラーシ通りにオペラ座が幕開けし、世紀末には首都の音楽生活の中心となった。ヴィガドー・ホールではコンサートが定期的に行われたが、これらの常連客は豊かな市民と上流知識人であった。市民の多くはどちらかと言うとオペレッタや寄席を楽しんだ。演劇にはいつも市民の成熟度のバロメーターのようなところがあるが、1837年以来活動している民族劇場はすでに「民族精神の守護者」をもって自らを任じ、むしろ社交の場といった趣であった。そこに通うことは名望ある市民の半ば義務と見なされていた。新しく出来たヴィーグ（娯楽）劇場はヨーロッパの自然主義劇なども上演したが、観客の実体をなす市民階級の妥協的精神さながらにセンチメンタルなレパートリが多かった。モルナール・フェレンツら後に外国で活躍する作家たちもここから育った。モルナールは意識的にペスト文士たらんと努めたが、日本でも知られる「リリオム」や「パール街の少年たち」もペストを舞台にしている。

さてブダペストを語るに、カフェ文化を避けて通るわけに行かないだろう。カフェは19世紀初めから第二次世界大戦までのブダペストで重要な社会的文化的役割を果たした。1900年にはその数すでに500を越し、アンドラーシ通りには何と二つの建物毎に一つずつカフェがあったと言われる。それは男たちの「第二のわが家」であった。もっとも社会民主党左派の思想家サボー・エルヴィンによれば、すべては劣悪な住宅事情のせいであり、ここはわずかな金で長時間過ごすことができる民主主義的施設でもあった。彼らはコーヒーを飲み、食事をし、内外の新聞、雑誌を読み、読書をし、原稿を書き、電話をかけ、取引を行い、ビリヤードやカルタやチェスをし、何よりも談話を楽しみ、議論をし、雑誌の編集までした。要するに、情報交換、娯楽、接待の場として市民の生活様式に完全に組み込まれていた。これらのカフェは今日ほとんど姿を消したが、文学雑誌「ニュガト」編集部の常席があったことで知られるカフェ「ニューヨーク」は健在であり、そのヨーロッパでも指折りの豪華絢爛たるインテリアを楽しむことができる。今はないが、「ヤパーン（日本）」も著名であった。白い陶壁に竹や菊が描かれていたというから、世紀末ジャポニズムに基づく命名であろう。ここには美術家たちやレヒネルの常席があった。戦間期にはヨージェフ・アティッラたち左翼的知識人が集う場でもあった。のちに訪れた横光利一は100メートル四方もある大きなものだと伝えている。

ブダペストは内側をますます都市らしく整備していっただけでなく、外側に向かってどんどん同心円的に拡大していった。ブダペストの急激な人口増は住宅問題の深刻なひずみとなって現れた。ブダペストはヨーロッパで最も過密な都市であった。1910年にはブダペストの住民の

三分の二が商工業で生計を得ていたが(官吏、知識人が16%、家事使用人が14%)、その労働者たち、日雇い労働者たちの住区が外へ外へと形成されて行った。当時40万人が一部屋の住居に、20万人が二部屋の住居に暮らしていた。ほとんど電灯も排水設備もなかった。賃借りの平屋住宅が密集し、工場地帯は煙突が煙を吹き上げていた。多くの労働者たちの慣習や生活様式はまだ千の糸で出身母体の農村と結びついていた。どぎつい貧富の対照が近代都市のもう一つの顔を覗かせた。近代都市ブダペストの栄光は、流入し続ける労働人口の劣悪な生活条件と表裏をなしている。労働者運動や社会主義思想もひろまり始めた。すでに1860年代から労働者の組織化の試みが始まっていたが、1890年には社会民主党が結成され、この年初めて行われたメーデーの行進には6万人が参加した。さしあたり普通選挙権の獲得が最大の要求であった。議会や貴族・資本家たちのクラブのほかに再び街頭が政治の舞台に仲間入りした。二重帝国のもとで一般にそうであったように、ハンガリーでも労働者運動は首都にもっぱら集中している。

4

さてここで19世紀のブダペストの近代都市としての発展を人口の面から跡づけてみよう。最初の信頼できる人口調査が行われた18世紀末(1784)、ヨーゼフ二世の時代には、三つの都市の人口ほぼ5万、規模から言うとおわせてもヨーロッパの中都市に入るかはいらないかというところである。だが19世紀前半の興隆は目ざましく、1848年革命時のペスト＝ブダの人口はすでに15万人に達していた。しかし本当の興隆は世紀後半以降のことである。概数で記すと、ブダペスト統一の1873年にははや人口30万、1890年には50万人、さらに第一次世界大戦前には実に90万人、今日の大ブダペストに属する周辺地域をもふくめると100万人という巨大都市に成長した。全ハンガリーの人口18%が都市部に住み、その三分の一がブダペストに住んでいた。歴史学者ハナーク・ペーテルの推計によると、1785年と1910年の人口統計の間の125年間に、自然増によって見込まれる増加はせいぜいのところ15、6万人にすぎない。(当時のハンガリーでは子供は一家族7、8人生まれたものの、そのうち生き残るのは3、4人であった。)とすれば、この驚くべき人口増は明らかに外からの膨大な流入に基づいていることになり、流入人口は自然増の4、5倍にも上ると概算される。1880年の調査では住民の43%がブダペスト生まれ、46%はハンガリーの他地域から、11%は外国からやって来た。1910年には、わずか35%がブダペスト生まれであり、59%が地方から、6%が外国からの流入者であった。これらの統計もほぼ上の概算を裏づけている。

19世紀を通じてのブダペストの急激な人口増加が、資本主義経済の発展と不可分に結びついており、都市自体の中に大きな社会的階級的対立を顕在化させ始めたことについては先述した。しかしもう一つ触れておかなければならないのは、人口増加に並行する顕著な民族同化現象である。国内外から流入した他民族人口はブダペストを多民族構成にするどころか、逆にごくわずかな世代の間にハンガリー人に同化してしまった。これはちょうど同じ時期にウィーンではドイツ化が、プラハではチェコ化が進んだのと共通の現象である。18世紀の末にはまだブダとペストの四分の三がドイツ語人口であり、ペストにはさらに多数のギリシャ系、セルビア系の商人もいた。ハンガリー人は五分之一にも達しなかった。ブダペストは中央ヨーロッパにおいてその多民族混交ぶりによって聞こえていた。独立戦争の時代にさえ多数はドイツ語人口であり、ハンガリー語人口は三分の一にも満たなかった。詩人アラニ・ヤーノシュは「通りには塵、

悪臭、ドイツ語、汚物」と当時のペストの町を歌っている。しかし19世紀後半、とりわけ二重帝国の時代には嵐のようなハンガリー化、言語的文化的同化が進み、1910年には住民の85%がすでに自分の母語をハンガリー語と見なすにいたっている。これはブダペストが19世紀というハンガリー人の民族的覚醒の時代に、それと有機的に結びつきつつ都市となり首都となり政治・経済・文化の中心となっていた過程に深くその根を持っている。同化した大半はドイツ人、スロヴァキア人、ユダヤ人であった。彼らは何世紀もの間ハンガリー人と隣りあい互いに入り組みあって暮らしてきたが、このように多量の民族的同化が問題となることはなかった。近代的民族融合としての同化は、18世紀末に始まり、本質的に19世紀の現象である。19世紀は資本主義の展開、商工業の発展、都市への人口移動、近代都市の形成の時代であり、これらが同化の基盤であり、決定的契機であることは、経済的に最も発達した地域ほど同化が進んだという事実によって証示されている。都市は民族同化のかまどとなった。無論同化した人々はそれによって以前よりも自らに好都合な社会的位置を見出した。商業網、信用組織、工業を築き上げたことは、これらの同化したドイツ人、ユダヤ人市民階級の仕事であった。逆に言うと、ハンガリー社会の発展の中で近代化、市民化の見地からどうしても必要なそれらの欠如こそ、同化の誘因にはかならず、その仕事を担うことを通じて彼らはハンガリー化したのである。他方19世紀後半の資本主義の急速な発展は、おびただしい数の労働力を都市に吸収した。それらの労働者たちも急速に同化した。ドイツ人、スロヴァキア人の農民の場合も、少なくとも子の世代の多くは学校に通い都市に職場を得る過程を経て同化した。軽工業、建築業の労働者のかなりの部分がスロヴァキア人であった。ハンガリーの民族歌「ヒムヌス」がドイツ系の作曲家エルケル・フェレンツの手になることは、この同化の問題に鮮やかな光をあてる興味深い例である。イブルやレヒネルの例が示すように、建築家も数世代に渡ってもっぱらドイツ系ハンガリー人の仕事であった。(但し、同化は必ずしも自然発生的にのみ行われたわけではない。学校でのハンガリー語専一教育、官吏のハンガリー人優遇措置などの利害誘導を通じて意図的に押し進められもした。)

ハンガリーのユダヤ人について言うと、全土で1787年に8万人いたが、1857年には41万人、そして1910年には91万人に達した。前世紀前半までに主としてチェコ方面から、いわゆる西方ユダヤ人の流入があり、また前世紀を通じてポーランド、ロシア方面からポグロムを逃れて多数のユダヤ人が流入した。その流入移動の経路は、都市へ、資本主義の中心へと通じている。ハンガリーのユダヤ人の四分の一はブダペストに、半分は他の都市に住みついた。1900年にはユダヤ人はブダペストの人口の20%を超え、選挙権を持つ者の40%に達している。当時ユダヤ人にとってこれほど自由な都市はヨーロッパになかった。ほとんどが商工業の分野（言うまでもないが、大半は小市民と労働者である）と知的職業人である。特に医者や弁護士では半数近くを、また技師の三分の一をユダヤ人が占めていた。彼らには1840年まで土地の所有は許されていなかったし、また都市の古い市民階級の中核をなすドイツ人たちは、競争相手となる彼らにこの年まで市民権を許さず、そのため官吏や多くの知的職業に就くこともできなかった。自然の傾向としてユダヤ人たちは商取引、金融などに多く向かって行ったが、それも大抵は行商から身を起こした。ユダヤ人たちの同化志向がまずハンガリーのリベラルな貴族階級に向けられたことはよく理解できる。改革期の理念に共鳴したユダヤ人の多くは、19世紀前半のうちに同化した。貴族たちが国のハンガリー化をもくろんだ時、欠如した市民階級の一部として農産物を商うユダヤ人は有用でもあった。しかも、その後も貴族への上昇志向をもつ市民階級と市

民化しつつある貴族階級にとって、取引、仲買、金融は社会的位階の最下位に位置すると考えられ、この社会的必要、空隙を主として充たしたのが同化ユダヤ人である。そして商業、金融の分野でノウハウを蓄積し、網の目を張り巡らした彼らの一部は、資本主義の発展とともに社会の上層へと躍り出たのである。

国外でもよく知られている思想家ルカーチ・ジェルジの家系もユダヤ系だから、これを例にとってみよう。祖父はまだ南ハンガリーのセゲドで布団の製造、行商を営んでいた。1849年の独立戦争ではコシュートの軍隊に入ってハンガリー独立のために戦った。すでにユダヤ人への帰属は宗教的慣習的な面に限られている。ユダヤ人の同化は概ねこのような限定の上に新しい民族的帰属を選ぶことで始まる。ジェルジの父は、家が貧乏なため上の学校へ行けず、ブダペストで苦学しながら銀行界に入った。やがて力を認められ、いくつかの銀行を渡りながら次第に出世して、ついには当時ハンガリーの大銀行の一つである一般信用銀行の専務取締役役にまでなった。1890年、それまでのレヴィンゲルという姓をハンガリー式にルカーチと改め、1899年には「金融界の業績によって」貴族に列せられたとされるが、これはつまり貴族の称号を買取ったということであろう。また彼は保守政界の大立者ティサ・イシュトヴァーンと親しい交わりを結び、伝説的なルカーチ家の豪華な晩餐には市長や有力な都市貴族たちが顔を見せたという。彼はこうして一代で成り上がったが、ハンガリーの政界を牛耳っていた貴族とジェントリにほぼすっかり同化していた。言わば冠婚葬祭のときだけがユダヤ人だった。祖父もブダペストへ引っ越してきたが、息子の社会的関係を損なわぬよう、ほとんど交わりを持たないようにしていた。ようやく1895年には法的にもユダヤ教が信教の自由の対等の対象とされたが、父は秀才の息子ジェルジを名声のあったルター派のギムナジウムに入れ、キリスト教に改宗させた。これは彼の「成功の哲学」に発するものであった。他方彼は若き日の貧困の体験を決して忘れることなく、才能ある若い芸術家たちに財政援助を惜しまなかった。ジェルジの父の経歴は、19世紀後半のハンガリーにおける急激な資本主義の発展と遅れた社会関係の両者に巧みに身を適応させつつ社会的に上昇していった一人の典型的なユダヤ人の像を示していると言えるだろう。

5

半封建的体制の下でもっぱら経済的蓄積と社会的地位向上に意を用いた父たちの世代に対し、資本家たちの息子の世代は知識と教育の獲得を前面に押し出し、政治的思想的発言を開始した。今世紀の初めにすでに自由業の経歴において大きな比重を占めていた新しい知識人たちは、同化したユダヤ人のこの若い世代を中核とし、旧知識人の民主的部分とともに、ハンガリー社会の封建的桎梏とたたかい始めた。1848年革命を準備した世代になぞらえ、これは第二改革世代と呼ばれている。また差別と抑圧に敏感なユダヤ知識人は社会主義思想への強い傾斜を見せた。ブダペストに思想芸術革命が始まった。ルカーチたちの自由劇場運動はそのはしりだった。ヤーシ・オスカルやサボーは社会科学協会とその機関紙「二十世紀」に拠って、ラディカルな社会批判を展開し、社会民主党と協力して労働者教育を行った。これは学生たちの学習組織ガリレイ・サークルの結成を促した(ボラーニ・カーロイはそのリーダーであった)。ルカーチやバラージ・ペーラを囲む日曜サークルは、問題を世界観の次元にまで深めようとした。マンハイム・カーロイ、ハウザー・アルノルドはその重要なメンバーであった。ヴァルガ・イエ

ネーたちのベンベ・サークルは「資本論」を繙いていた。バルトーク・ベーラやコダーイ・ゾルターンは、諸民族の音楽の源をたずねつつ、新しい音楽の創造を志していた。カッシャー・ラヨシュ、モホリ＝ナジ・ラースローら前衛的な美術家の集団が声を上げた。そして何よりも1908年には文学雑誌「ニュガト」が創刊され、進歩的な志向をもつすべての作家、詩人、批評家がここで協働した。雑誌名は西を意味するハンガリー語で、それによってハンガリーの文化的後進性の克服が意図されていたが、ヨーロッパ社会のはらむ矛盾もすでに自覚されていた。急進的な詩人アディ・エンドレの詩の底には、メシア主義的な革命への願望が鳴り響き、同時代人の心を揺さぶった。ブダペストは、遅れてきた近代の歪みに苦しみ、しかしまた自己の未来像としての西欧にも疑惑の目を向け、さながら近代社会の総体と対決する観念の実験場であった。のちにポラーニは経済人類学者として、ルカーチはマルクス主義哲学者として、バラージは映画理論家として、マンハイムは知識社会学者として、ハウザーは美術史家として、ヴァルガはマルクス主義経済学者として、それぞれ国際的な場で名を成したが、大きな歴史的な構想のもとに近代社会と対決し、それを相対化し、超えようとするところに彼らの共通点を見てよいだろう。今世紀初頭のこれらの営みは現代世界の思想的源流の一つとなった。この世代は、ひとつにはその才能の多面性によって、またひとつには多くの者がのちに国外亡命生活を余儀なくされたことを通じて、国際的な注目を受けた最初のハンガリー世代であったが、同時にほとんどがブダペストで生まれ、ブダペストで教育を受けたという意味でハンガリー史上初のブダペスト世代でもあった。

思想芸術革命は、ハンガリーの1918-19年革命へ向かう社会的胎動の表現でもあった。第一次世界大戦の極度の圧迫の下で、とりわけロシア革命の影響のもとで、首都の民衆は革命化した。二重帝国の軍事的崩壊とともに、旧体制は無能をさらけ出した。18年10月には自由主義的大貴族カーロイ・ミハーイを首班とするブルジョア民主主義政権が生まれ、ハンガリーを独立共和国と宣言。次いで19年3月には共産党のクン・ベーラを中心とするプロレタリア政権が誕生した。ルカーチがプロレタリア政権の教育人民委員になったのを始め、それぞれの思想家、芸術家が二つの革命に——少なくともどちらかに——何らかの形で関与した。革命は土地の分配を行わなかったために農民の支持を得られず孤立し、国際的な干渉を受けて短命に終わった。革命を鎮圧した摂政ホルティ・ミクローシュによる「国王なき王国」の権威主義的体制のもとで、「罪の都市」ブダペストに対する非難が繰り返されたが、それは二つの革命が何よりもまず首都の革命であったからでもある。こうした非難そのものは別段新しいものではなく、すでに1890年頃から姿を見せ始めたが、当時はまださしたる意味を持たなかった。1910年に保守的な文学者ホルヴァート・ヤーノシュと「ニュガト」の編集者イグノトゥシュの間で「ブダペストはハンガリー的か」をめぐる論争があったが、これなどすでに論題からして特徴的と言えよう。先述した非ハンガリー系の人口構成の高さ、ユダヤ知識人と急進思想の結びつきとともに、ハンガリーの農業社会に屹立する唯一の大都市ブダペストの特異な位置が、繰り返されるこれらの非難、疑惑の背景にある。ブダペストは、多民族国家の支配者側民族の一つとして、しかも遅れた半封建的社会構造のまっただ中で、それを引きずりながら近代化、工業化したハンガリーの集約的な表現であった。

中欧列強の敗北、オーストリア＝ハンガリー帝国の解体、トリアノン講和条約によってハンガリーはそれ以前の領土の三分の一、つまり現在の大きさになった。ポジョニヤやコロジュヴァール（現ルーマニアのクルジ）のような大きな都市が多数のハンガリー人ともども国境の向こう

に置かれたことは、ハンガリーの中での百万都市ブダペストの比重をいっそう高めさせた。反革命体制のもとで「キリスト教的民族的」と称するスローガンが喧伝され、首都の純化がうたわれたが、その狙いは、二つの革命に参加し或いは共鳴した労働者や進歩的知識人たちを徹底的に追及することとともに、経済の実権を握るユダヤ系資本家を牽制して政治の実権をジェントリ的手中に確保することにあった。またブダペストの相対的自立性を制限することも意図されていた。革命に積極的に関与した人たちは国を出ることを余儀なくされたが、これは世界の社会運動や学問芸術などの知的分野にすぐれた頭脳や働き手を供給することになった。

大都市ブダペストと多くは農業的なハンガリー全体との深いギャップは。それを克服しようとする知的営みにも鋭く表現された。二つの世界大戦の間に明瞭な形をとった、いわゆる都市派と人民派の作家の対立もここに根を持っている。大土地所有がなお支配し、多くの農民が土地を持たないハンガリーは現実に「三百万の乞食」の国であった。とりわけ大恐慌を契機に、農村の悲惨と不満を調査し、農民の革命的伝統を呼び覚まし、そこにハンガリーの現状打開と救いを見出そうとする作家たちの運動が起こり、イエーシュ・ジュラの「プスタの人々」などに代表されるすぐれた作品が生まれた。これに対し、ブダペストを生活基盤とし、都市の人間の生活感情を描くことを通じて現代の先端を捉えようとする作家たちは、人民派の運動と発言に民族主義や非合理主義を見出して批判した。これらの作家たちを都市派と呼んでいるが、この名称は人民派との関連で用いられる総称であって、運動やグループとして存在したわけではない。逆に人民派の作家たちは彼らのコスモポリタン性、権力への妥協性を批判した。都市派の作家たちは、都市の外の農民たちの運命にはまるで無関心であっただけでなく、労働者の生活にさえ彼らの視線はほとんど届かなかった。テーマ圏も出身も異なるこの両派の対立を、反ファシズム統一戦線と文学上のリアリズムの観点から止揚しよう試みも見られたが、この対立は、戦後の土地改革を経てなお、今日に続く大きな潮流の源をなしている。

戦間期には共産党は非合法化され、社会民主党も農村では活動しないという条件で辛うじて非合法化を免れている状態であったが、ブダペストでは労働条件の改善を求める労働者の闘争が粘り強く続けられた。大恐慌後の1930年9月には戦間期最大のデモが行われ、何万もの失業者がパンと職を求めて行進した。労働者運動は30年代の後半一定の成果を上げたが、政治のファシズムへの流れを食い止めることはできなかった。「領土回復」が声高に叫ばれた。38年には反ユダヤ法と再軍備への道が踏み出され、ナチスドイツへの接近を露にした。こうしてハンガリーは第二次世界大戦で日独伊枢軸国側に加わって戦い、再び手痛い敗北を喫することになる。

1945年2月ブダペストは最終的にソ連軍の手でファシズムから解放されたが（とりわけゲットーに閉じ込められていたユダヤ人たちにとっては文字通りの解放であった）、町に立てこもるドイツ軍とそれを攻囲する赤軍の六週間の戦闘によって何度目かの廃墟となった。鉄道や工場や橋は勿論、建物の四分の三が破壊されたり損傷を受けたりした。ブダペストはベルリン、ワルシャワと並んで最もひどく破壊されたヨーロッパの首都のひとつであった。1944年に138万人を数えた首都の人口は、45年3月には83万人になっていた。多くは連行、テロル、爆撃、戦闘の犠牲者である。戦後の復興はほとんどゼロ地点から出発しなければならなかった。亡命して外からファシズムと闘っていた政治家や知識人たちが帰国した。ハンガリーは1946年共和国を宣言したが、復興とファシズムの清算を目指す民主主義的共同の体制は長続きしなかった。世界の冷戦体制の強まりのもとで、49年には人民共和国の樹立が宣言されるとともに、小スターリンとも言うべきラーコシ・マーチャーシュによってソ連型社会主義の急速な導入がはかられ

た。無理な工業化の生活へのしわ寄せと人権抑圧に抗して、56年ブダペストに労働者や知識人の反乱が起こり、ソ連の戦車が鎮圧に乗り出して、町は市街戦の舞台となった。再び大きな人的物的被害が出ただけでなく、多数の人が亡命し、人心が荒廃した。その後に登場したカーダール政権は、消費生活を重視し、60年代には意欲的な経済改革に取り組んで、その結果東ヨーロッパきっての豊かな生活は注目されることとなった。耐久消費財はほぼこの頃各家庭に行き渡る。しかし経済改革は徹底せず、社会主義的民主主義の大胆な拡大を伴わぬ上からの改革は、結局ソ連型社会主義に代わるモデルにはなりえないものであった。

6

振り返ってみると、ブダペストが歴史の曲がり角のたびごとに繰り返し流血の戦闘の舞台となったことがまず目につく。しかし1989年の大変革は、中東ヨーロッパの他の多くの国同様、流血の事態には至らなかった。にもかかわらず、最初に上からの改革に火をつけた改革派をも含め、社会主義労働者党がその後の過程で急速にその影響力を失うほどの激動でもあった。ハンガリーは経済の低迷と混乱に苦しみながら、新しい社会形態を模索しつつある。ブダペストの市民が、幾度もの破壊から立ち上がった生命力をもう一度発揮するだけでなく、歴史的経験を生かし、ハンガリー全体をリードして、諸個人と諸民族の自由で対等な新しい関係へとどのように接近して行こうと試みるか、注目したいところである。

さらに目につくのは、やはり19世紀後半におけるブダペストの都市としての目覚ましい興隆であり、それを基盤とした今世紀初頭の、文化の諸領域における一群の才能の輩出・開花であろう。文化的高揚がこのような鮮やかさで再び回帰してくることはその後なかった。しかし「第二改革世代」(ホルヴァート)、「1900年の世代」(ジョン・ルカーチ)と呼ばれるこの時期への関心は単なるノスタルジアに基づくものではない。動乱の20世紀の、その後に展開されることになるさまざまな思想的・人間の問題性がすでに芽の形でそこに含まれていると認識されたがためにほかならない。ポラーニ族やルカーチ・サークルの研究という形でそれは持続しており、私自身もかつて「若きルカーチの〈演劇的使命〉」(「金沢大学教養部論集」第17号)や「ブダペスト日曜サークルとその思想史的諸問題」(「社会思想史研究」第5号)においてルカーチに即して部分的に論じたことがあるが、この時期の思想・文化運動の全体像となると、まだ今後の課題である。

なお書き忘れたので付記するが、ブダペストは1950年以来周辺の地域を合併して、525平方キロ、22の行政区から成る大ブダペストとなった。現在、ハンガリー人の五人に一人がブダペストに住んでいる。

〔参考文献〕

- Ságvári Ágnes (szerk.): *Budapest Fővárosunk története*, 1973
 Horváth Zoltán: *Magyar századforduló — A második reformnemzedék története (1896-1914)*, 1974
 栗本慎一郎「ブダペスト物語 — 現代思想の源流をたずねて」, 1982
 Péter Hanák: *Ungarn in der Donaumonarchie*, 1984
 John Lukács: *Budapest 1900*, 1988 (邦訳「ブダペストの世紀末 — 都市と文化の歴史的肖像 —」早稲田みか

訳, 1991)

Budapest Enciklopédia, 1981